津島の記憶 残したい

元住民・馬場さん撮影 震災前後の姿、写真集に

津島にも人々の暮らしがあったことを忘れないでほしい―。浪江町津島地区の元住民で大玉村に住む馬場靖子さん(83)は、東京電力福島第1原発事故で帰還困難区域となった津島地区の写真集「あの日あのとき 古里のアルバム 私たちの浪江町・津島」を出版した。震災前と震災後の両方の写真を掲載しており、馬場さんは「穏やかな日常があったことを多くの人の記憶に残してもらいたい」と思いを語る。

小学校教諭を退職した2001年、友人の誘いでカメラを趣味にした。常にカメラを持ち歩き、出荷する牛をトラックに載せる農家や農作業後に談笑する住民など、津島の日常を写してきた。「こんな生活をしていたんだというのを残したかっただけ」と馬場さん。被写体の笑顔にこだわり、シャッターを押してきた。

原発事故で実家のある喜多方市に避難したが、津島のことが心配でしばらくカメラを持てなかった。それでも青空の下で咲くスイレンの花を撮影し、改めて写真の魅力を感じたことで再び撮影を始めた。「津島の暮らしを残さないと」。カメラを持つ理由も変わった。

「震災前の様子をもっと撮影しておけばよかった」。馬場さんには心残りがある。だからこそ、震災後は草木が伸びきった自宅周辺や自宅を片付ける自分自身、仮設住宅で談笑する避難者など多様な場面を撮影してきた。昨年1月に自宅を解体した際もカメラを向けた。

事故から間もなく14年。津島の生活を広く知ってもらいたいとの思いが強くなり、写真集にすることを決めた。「原発事故さえなければ写真集なんて出さなかったのに」。古里を奪われた怒りは今も消えていない。(三沢誠)

津島地区の写真集を出版した馬場さん。「津島の日常を忘れないでほしい」と思いを語る

450枚掲載

写真集は昨年10月に出版された。約260㌻で約450枚が掲載されている。値段は3520円(税込み)。東京印書館のホームページなどから購入できる。

「古里のアルバム」に掲載されている写真

▲ 1月12日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

調べてわかったこと、考えたこと（330字程度）

どの地域にも何気ない、でもいとおしい風景がありますね。皆さんはどんな景色が好きですか？

福島民友投稿のページ「窓」に送る